様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　6 月　10 日現在

機関番号：32682
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2010～2012
課題番号：22320164
研究課題名（和文）　前方後円墳体制東縁地域における国家形成過程の研究：常陸の場合
研究課題名（英文）　A Study of the State Formation Processes in the Eastern Peripheral Region of Japan: A Case of the Old Province of Hitachi
研究代表者
佐々木　憲一（SASAKI　KENICHI）
明治大学・文学部・教授
研究者番号：20318661

研究成果の概要（和文）：本研究では、東国第 2 位の規模を誇る国史跡、石岡市舟塚山古墳（5 世紀前葉）とかすみがうら市折越十日塚古墳（7 世紀初頭）を精密に測量調査した。その結果、舟塚山古墳は葺石は葺かれていないものの、左右対称の周濠を有する、全長 186m の非常に畿内的な墳丘であること判明した。折越十日塚の現存墳丘長は 64m であるが、畿内で前方後円墳築造が廃れた時期に二重周濠を有する本格的な前方後円墳であることがわかった。

研究成果の概要（英文）：We have mapped two large keyhole-shaped tumuli in the southern Hitachi region.　The early fifth century Funatsukayama tumulus is 186m long, and its symmetric plan of the mound clearly suggests that it was under the strong influence of the central polity of Kinai.　The early seventh century Okkoshi-Tokazuka tumulus is presumably more than 70m in length, enclosed by two moats.　It is significant to note that such an elaborate keyhole-shaped tumulus with two moats was built in the early seventh century when the construction of keyhole-shaped tumuli declined in the central polity of Kinai.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	6,100,000	1,830,000	7,930,000
２０１１年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
２０１２年度	3,000,000	900,000	3,900,000
年度			
年度			
総　計	13,300,000	3,990,000	17,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：日本考古学、古墳時代、国家形成、測量調査、墳丘墓、周縁地域

１．研究開始当初の背景

(1) 古墳時代は社会が国家に向けて進化しつつあった時期である。そのプロセスに迫るひとつの有効な手段は、首長墓であったことが想定される前方後円墳の調査である。しかし、東海道の東端である常陸地域は、前方後円墳が 400 基以上知られているが、精密な測量された前方後円墳は 50 基もない。したがって、常陸地域内の在地豪族同士の系譜関係なども、墳丘築造企画の面から迫ることは不可能に近かった。もちろん、発掘調査も極めて有効であるが、常陸の場合、限られた研究機関と予算の枠内で、古墳 1 基の発掘調査より、複数基の測量調査を実施、埴輪を採集する方が、効果が大きい。

(2) フィールドとしては、後に国府・国分寺が設置された常陸南部地域（茨城県石岡市とその周辺）を意識して選択し、常陸における国家形成過程に迫る上でより有効である。またこの地域は、2001～2004年度に本研究代表者が分担者として参加した科研で、体系的な測量調査を実施した地域に隣接しており、この科研の成果と今回の研究成果を統合し、より説得力のあるモデルも提示可能である。

(3) 古墳は群を成して存在することが多いから、採集した埴輪に基づき編年を構築、その編年により古墳群のなかでの古墳築造の順序を明らかにし、どの時期に前方後円墳が築かれ、どの時期に前方後円墳築造が廃れたかを明らかにすれば、古墳群を在地首長一族の世代を超えた墓域と仮定したとき、首長系譜の継続と断絶にも迫ることができる。

２．研究の目的

本研究の目的は、相互に関係し合った２つにおおきく分けられる。

(1) 大型前方後円墳の精密な測量調査を実施することで、墳丘築造規格の面から豪族同士・中央豪族と地方豪族との諸関係に迫ることである。つまり、豪族同士の合従連衡の可能性をモデル化することである。

(2) 測量中に採集する埴輪に基づき、古墳築造の前後関係を明らかにし、古墳群のなかでどの時期に前方後円墳が築かれ、あるいは前方後円墳築造が廃れたのか、明らかにすることである。

(3) この両者を総合判断することで、古墳時代常陸南部における複数の在地首長系譜がいつ連合し、分裂し、個々の首長系譜が継続した時期、一時的に断絶した時期を明らかにする。

３．研究の方法

(1) 2001～2004年度に本研究代表者が分担者として参加した科研で、茨城県小美玉市南部の大型前方後円墳・円墳を等高線間隔25cmで測量調査した経緯があり、その成果と今回の成果を統合解釈するために、今回も等高線間隔25cmで大型前方後円墳を測量した。

(2) 測量調査の対象として、かすみがうら市折越十日塚古墳と石岡市舟塚山古墳（国指定史跡、東国第２位の規模を誇る大型前方後円墳）を選んだ。後者については、その規模の大きさから、２か年に分けて調査を実施した。

(3) 折越十日塚古墳は雑木・竹が生い茂っているため、事前の伐採を必要とし、業者に委託した。

(4) 両古墳とも、平板による手測量を行った。これは、古墳築造以後の墳丘の改変などをまず研究者の目で認識し、それを測量図に反映させるためである。ただし、舟塚山古墳はあまりにも大きいので、基準点測量は測量会社に委託し、正確さを期した。

４．研究成果

(1) かすみがうら市折越十日塚古墳墳丘の測量調査、横穴式石室の実測調査を実施した。現存墳丘長は64.0m、後円部径33.0m、後円部高さ6.0m、前方部長27.0m、前方部高さ4.5m、くびれ部幅17.0mであった。しかし墳丘、特に前方部は大きく削られており、墳丘全長は70m以上、前方部超は35m前後に復元できそうである。なお、測量調査の過程で、埴輪片を一切最終することができなかった。常陸では6世紀末までに埴輪生産が終了することが知られているため、この古墳の築造が6世紀末以降であることを示唆する。

(2) 折越十日塚古墳横穴式石室の実測調査の結果、7世紀初頭に特徴的な、複室構造の埋葬施設であることが判明した。羨道（遺骸が置かれた部屋[玄室]への通路）は埋没しており、実測できなかった。玄室、前室の規模は次の通りである。全長5.45m；玄室長 2.58m、幅 2.09m、高さ1.78m;前室長2.67m、幅1.70m、高さ1.30m。なお、横穴式石室内は赤色顔料が塗布されており、折越十日塚古墳は装飾古墳である。

(3) 測量調査の過程で、折越十日塚古墳は二重の周濠を伴う可能性が極めて高いことがわかった。7世紀初頭という、古墳文化の中心である近畿地方で前方後円墳の築造がすでに廃れている時期に、二重周濠を伴う本格的な前方後円墳が関東で築造されていた意味は極めて大きい。

(4) また、霞ヶ浦北西岸の地域史を考える上でも折越十日塚古墳の調査成果は重要である。６世紀は玉里地域の勢力が強かっ

たようで、前方後円墳の築造が玉里地域で継続するが、それも６世紀後半には廃れてしまい、７世紀には円墳しか築かれない。それに代わって、折越十日塚古墳の立地する出島地域では６世紀末から７世紀初頭にかけて前方後円墳の築造が相次ぐようだ。しかしながら、７世紀末になって古代寺院が築かれるのは、５世紀に勢力を誇った舟塚山古墳の付近に戻るのである。この地域における首長系譜の継続と断絶を理解するための、新たなデータを提供することができた。

(5) 石岡市舟塚山古墳墳丘および周濠の測量調査を実施した。墳丘全長は 186m、後円部直径 88m、前方部幅 99m、くびれ部幅約 60m(想定する造出を除く)、後円部周辺、前方部前端周辺の周濠幅約 40m である。

(6) 今回の測量調査の大きな成果は、周濠が全周する可能性が高くなったことである。特に、前方部南西隅の先の林のなかで、これまで存在しないと思われてきた西側周濠の堤が良好に残存していることがわかった。また、くびれ部北側は造出の存在が蓋然性の高い可能性として、従来より想定されてきたが、くびれ部南側付近で形象埴輪片を採集できたため、現在大きく削平されているくびれ部南側にも造出の存在を想定することが可能になった。

(7) 以上の結果、舟塚山古墳は、盾形周濠を有する左右対称の、非常に「畿内的」、百舌鳥古墳群的な中期の古墳であることがわかった。しかしながら、葺石はなく、その点で常陸の地域色を主張している現実は興味深い。

(8) 今回、多数の埴輪片を採集したが、黒斑を有し(つまり野焼き)、外面調整は１次、２次ともに縦ハケで、やや薄く、近畿地方では４世紀後半の埴輪の特徴を有する。しかしながら、墳丘そのものが５世紀に特徴的なものであり、舟塚山古墳の築造年代を５世紀前葉と考えたい。

(9) 舟塚山古墳被葬者と他地域の豪族との関係は今後の課題である。玉里の塚山古墳が舟塚山古墳後円部の築造企画を採用している可能性は、今回十分検証できなかった。千葉県三ノ分目大塚山古墳の墳丘築造企画との共有の可能性も今後の課題である。とはいえ、畿内的な古墳が極めて稀な常陸において、非常に畿内的な前方後円墳が５世紀前葉に築かれたことの意味は大きい。また６、７世紀は舟塚山古墳付近に前方後円墳は築造されないようだが、７世紀末に古代寺院がこの付近に建立され、また８世紀の国府、国分寺も現在の石岡市内に設置されるという事実も示唆的である。そういった歴史的現象に迫るひとつのデータを提供できたことは自負してよい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 佐々木憲一、常陸―中期古墳の再検討、東北・関東前方後円墳研究会、査読無、18 巻、2013、pp. 3-7.
② 佐々木憲一、日本考古学の方法論―アメリカ考古学との比較から、考古学研究、査読有、第 59 巻第 3 号、2012、pp. 23-31.
③ 佐々木憲一、鶴見諒平、九重明大、木村翔、千葉隆司、茨城県かすみがうら市所在古墳時代終末期の前方後円墳測量調査、古代学研究所紀要、査読無、第 17 号、2012、pp. 131-151.
④ 佐々木憲一、鶴見諒平、茨城県石岡市丸山 4 号墳再測量調査報告、古代学研究所紀要、査読無、第 16 号、2012、pp. 3-18.
⑤ 佐々木憲一、古墳時代像と国家概念、季刊考古学、第 117 号、査読無、2011、pp. 48-55.
⑥ 佐々木憲一、鶴見諒平・木村翔・川口武彦、茨城県水戸市西原古墳群測量調査報告、考古学集刊、査読無、第 7 号、pp. 79-97.

〔学会発表〕（計３件）

① 佐々木憲一, Local Elites and Foreign Interactions in Kofun-period Japan, Association for Asian Studies, San Diego, California, U.S.A., March 23, 2013
② 佐々木憲一、考古学から見た初期の都市、公開シンポジウム「難波宮下層遺跡と都市」於大阪歴史博物館、2012 年 12 月 23 日
③ 佐々木憲一, Autonomous Role of Peripheral Polities in the Process of State Formation in Japan, 第 76 回アメリカ考古学会 Society for American Archaeology 総会, 2 April,2011, Sacramento, California, U.S.A.

〔図書〕（計１件）

佐々木憲一, 他、有斐閣、はじめて学ぶ考古学、2011、総頁数 336 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
佐々木　憲一（SASAKI KENICHI）
明治大学・文学部・教授
研究者番号：20318661

(2)研究分担者
田中　裕（TANAKA YUTAKA）
茨城大学・人文学部・准教授
研究者番号：00451667

日高　慎（HIDAKA SHIN）
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：70392545

倉林　眞砂斗（KURABAYASHI MASATO）
城西国際大学・観光学部・教授
研究者番号：90186495

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：